

杉 沢

L

一九八三年六月二二日

国道三九九号線ぞいの稲子部落を過ぎて少し進むと、小さな杉沢橋に着く。この橋のたもとから遊行を開始するが、沢幅は狭いし兩岸も低く平らな為、どうも沢登りという感じがしない。

何の変哲もない小沢を中程までつめた頃、突然目の前をカモシカが逃げていった。カモシカの方もこんなところで人間に会うとは思っていてもなかっただろう。
この先は、次第に水量も少なくなり、兩岸の木が生い茂ってトンネルのようになってきたので、一〇時二〇分、遊行を打ち切って、出発点に

戻る。結局、最後まで滝の一つもなく、春の小川といった感じの沢であった。
(記・杉沢)

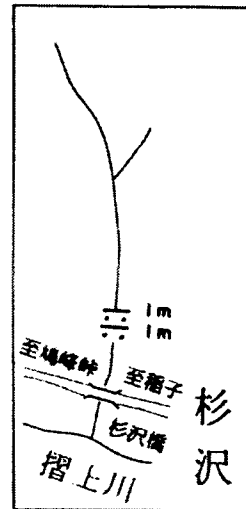
後沢下流部

L

一九八五年七月二二日

落合橋から遊行を開始する。河原を進んでゆくと、すぐに板谷沢の出合に着く。後沢の方がいくらか水量が多い。このあたりの木々は、いたる所に収穫調査周測の表示がされている。いずれ、伐採される運命にあるようだ。

「タイム」 杉沢橋(八:五五) ↓ 遊行
中止点(一〇:二〇) ↓ 杉沢橋(一
一:三〇)



依然河原歩きが続く。途中、広々とした杉の造林地が現われる。七年生くらいの木のような。元にもどるにはあと何年かかるのだろうか、気の遠くなる話である。

一五時五五分、遊行を開始して一時間一〇分で七ヶ宿に至る道路に出

る。ここで遊行を終了とし、道路を歩いて落合橋にもどる。

茂庭の沢を歩いて感じるのだが、林野行政は、民間の営利優先の林業では日本の緑を守れないとして、国が行なってきた事業だと聞いていたが、国有林は至る所伐採され、裸同然にされているように見える。赤字

を理由に伐採が急激に進んだり、造林に手を抜くようなことになれば、自然は破壊され、日本の緑は危機に面してしまうのではないだろうか。

(記・禾多 乙)

「タイム」 落合橋(一四・四五)↓板谷沢出合(一四・五五)↓橋(一五・五五)

後沢左俣左沢・右沢

一九八三年九月一日

ある地域の沢のすべてを遊行してしまおうという計画を実行していると、いずれは「この沢には滝などないはず」とわかっている沢にも入らねばならない時がくる。後沢もそうした沢の一つ。滝といえるものも無いまま源頭に達してしまった。おま

けに伐採・造林用の林道が沢と並行して走っているときた。とにかくこなさねばという使命感から遊行した一日だった。

八時三五分、後沢橋より遊行開始。何もない沢を一〇分程歩いた所で二ホンザルの群れに会った。姿を確認

したのは一三頭であったが、鳴き声やブッシュの動きからしても多くの群れである。かんだかい警告の声をひびかせながら、ゆっくりと右岸の斜面を登っていった。

二匹の小滝が出てきたので、直登する。左俣では唯一ともいべき滝だった。

しばらくしてまたサルに会う。今度は一頭きりで、尾根の上のトチの木に腰かけている。先ほどの群れと別れてから五分程しか経っていない。このあたりでみかけるサルとしては大きな方である。先ほどの群れの一部なのか、それともハナレザルなのか。距離があったこともあるが、逃げようともしなかった。

九時、二俣に着く。林道は左沢ぞいに入っているが、右沢方面にも造林地は広がっているようだ。左沢に

ルートをとる。

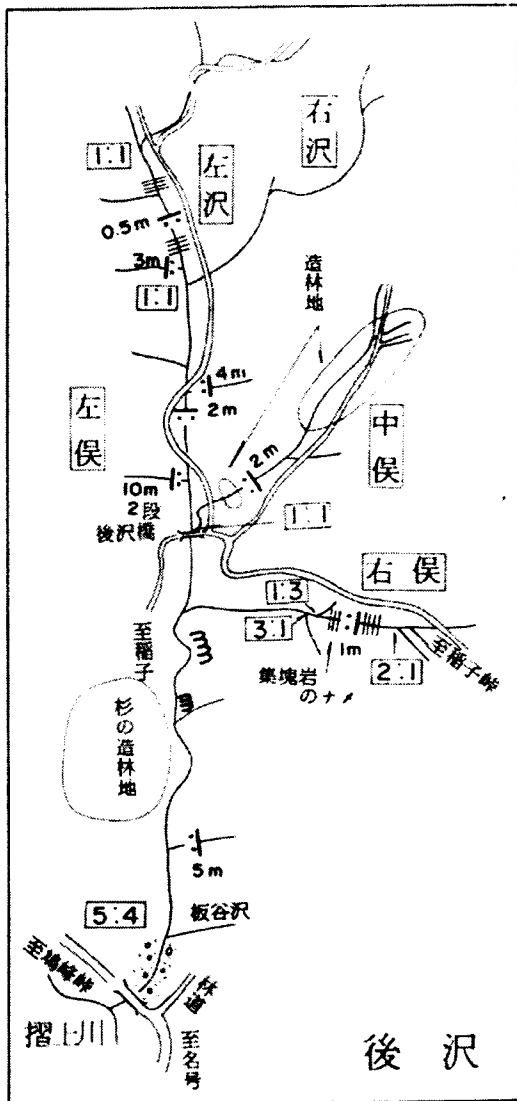
九時二〇分、沢は平凡なままでまた二つに分かれた。よっぽどこで帰ろうかと思ったのだが、やはり計画通り右沢の下降をやるうと思いついて、遊行を続ける。

九時三〇分、沢ぞいの林道は終点となったが、造林地はまだ奥へと続いている。沢の方かというと、これはもう細々とした流れでしかな

い。これはもうここまでと、右手の斜面を登り、尾根を越えて右沢の下降に移る。

一〇時、右沢の下降開始。右沢は全く平凡で、滝一つかからないままに一五分で二俣まで下ってしまった。あとは林道に上がって、後沢橋をめざす。

帰途、またまたサルの群れに出会ってしまった。場所は今朝がたとほ



国道上で見かけたニホンザル

ぼ同じ所である。一一頭が視認できた。断定はできないが、朝方会ったのと同じ群れではないかと思う。トチの実やドングリを一生懸命食べていたようだ。(記・い・文)

- 「タイム」 後沢橋(八:三五) ↓ 右沢
 出合(九:〇〇) ↓ 左沢終了(九:〇〇)
 三〇) ↓ 右沢下降開始(一〇:〇〇)
 〇) ↓ 下降終了(一〇:一五)